

木曾川



宝暦治水250周年特集号

宝暦治水250周年 寄稿

近世大名と手伝普請

この過酷な課役の悲惨度

愛知学院大学名誉教授 林 董一氏

宝暦治水250周年記念 座談会

日本近世史から見る宝暦治水、
その新たな姿

TALK&TALK

奄美諸島の黒糖栽培と薩摩藩支配

名瀬市文化財審議委員 弓削 政己氏

歴史は時空をこえてつながる

大島郡和泊町歴史民俗資料館 先田 光演氏

宝暦治水顕彰活動

宝暦治水に学び、その偉業を後世へ。

宝暦治水250年という記念すべき年に寄せて

宝暦治水の絆をさらに未来へ。

薩摩義士250年祭 (鹿児島市平田公園)

木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆さまとともに考えていきたいと思っています。
宝暦治水から250年を迎えた今年。
「宝暦治水250周年特集号」と題して、
御手伝普請の歴史的な検証、
近世治水行政における位置付け、
各地で開催された記念式典などを中心に紹介します。



宝暦治水二五〇周年 寄稿

近世大名と手伝普請

この過酷な課役の悲惨度

愛知学院大学名誉教授 林 董一氏



林董一氏

一九二七年、名古屋生まれ。法学博士。中日文化賞、明治村賞、東海テレビ文化賞受賞。愛知県文化功労者。

私はいま手もとに『護山神社御由緒』との題簽を付した、和としての小冊子を持ちあわせる。護山神社は本殿が濃州畷木曾、現岐阜県恵那郡付知町に鎮座。大正一二年（一九二二）五月、郷社から県社への昇格を願う。官司や氏子総代たちによつて、編まれたものらしい。

天保九年（一八三八）三月、江戸城西の丸、焼失。ここは退隱後も、なお隠然たる権力を保持する。大御所徳川家斉の住居。幕閣は再建を急ぎ、尾紀水の徳川御三家、前田家をはじめ、大名諸家にたいして、普請手伝を命じた。

すこし、本題を離れる。普請手伝は大名に賦課する、課役の一種。大名は主君たる將軍に奉公の誠をつくす一方、封土を受け、各種の課役を負担した。課役には、軍役と公役とが、軍役は將軍のために出征する外、幕令に応じて、一定数の人馬武器を差し出す義務。しかし、平和が続くにもとない、しだいに形骸化。公役は通常必要の都度、大名家をえらんで課せられた。江戸城門番、同火消、閑所支配、長崎警固等、なかでも、普請の助役は

どの大名でも、最大の災厄として恐怖的であった。

普請手伝、それは幕府が実施する大規模工事に、資材、労力、あるいは金品を提供すること。はじめは当局の指示のままだに、割り当ての工事現場に家臣を派遣し、人足代を主とする入用金を支出した。ところが、時代が移るにつれ、簡略となり、金納化される。施工は幕府で受け持ち、手伝側の関与することはない。高割りの分担金上納だけで、すむ。

話を戻そう。幕府は殿舎再普につぎ、尾張家に九万七九六四両を課し、その範囲内で建材の松を調達せよ、と命じた。当時は將軍家慶の治世、尾張家では家斉一九男斉温が当主の座に。普請惣奉行の老中水野越前守忠邦の意を体し、勘定吟味役の川路三左衛門、聖謀が来往。入場がきびしく制限された。熱田白鳥木場で存分に選木。そして、市場はもとより、他山でも入手できない大材は、藩領畷木曾、恵那郡加子母村地籍、井出小路山で伐採することにした。こぼれ、村民でさえ近づかない聖域、お囲い山。川路は容赦

なく踏みこみ、樹齢一〇〇〇年をこえる巨樹に、次ぎと斧を入れた。森の民の憤怒は絶頂に達し、報復に立ちあがる。川路の手記によれば、切り口から鮮血がほとばしり、たが、夜、小屋に怪獣が出没したとが、そればかりではない。將軍家大興に、連続して異変も。たまりかねた、家慶、天保一四年（一八四三）九月、付知の地に本社を造営し、木曾全山の守護神に定む。これが護山神社だと、『御由緒』は結ぶ。

さて、尾州からの献木は、金に直して一〇万六千七百四一両と推定され、限度を大きくこえる。ただ、たゞさえ窮乏にあえく藩庫は、たちまち危機に。しかも、である、他



天保9年木曾大材井出小路伐出之図巻（名古屋博物館所蔵）
江戸城西の丸再建用の檜を伐り出したときの様子を描く。

領の靈山を汚し、神木をまるで強奪するよつな幕吏の重横、唯唯諾諾と許す、藩首脳が無気力、無節操。怒り心頭の家士の一回は決起し、親幕派に対抗。抗争は奔流となつて、幕末、勤王への藩論統一の飛瀑を目がけ、流下していく。

私は、おもつ、西の丸助役一件は、尾張人士の心のひだに、深い傷跡を残したことは、紛れもない事実。と、だが、しかし、と続けておもつ、遠く異郷の普請場に、良臣を直接送つたうえ、八十余名の犠牲者を出し、四〇万両もの巨額を費消させられた、宝暦の薩摩藩治水工事は、どこか、悲惨さでは、これをはるかにしのぐのでは。と、私は濁流と死闘の限りをつくり、使命をはたした、義士の燦然たる偉業を、あらためて一段とまぶしく眼に感じる。

参考文献

- 『日本法制史概説』 石井良助著 一九八三年 創文社
- 『近世林業史の研究』 所三男著 一九八〇年 吉川弘文館
- 『新修名古屋市中』 第四巻 新修名古屋市中編集委員会編 一九九九年 名古屋市中
- 『支配体制の動揺』 黒田安雄分担執筆

座談会

宝暦治水250周年

日本近世史から見る宝暦治水、

その新たな姿

近世史上最大級の宝暦治水から二五〇年。薩摩義士の顕彰活動は明治から始められているものの、幕藩体制の中であるいは薩摩藩政史の中での位置付けなど、歴史的な検証には、まだまだ大きな課題が残されているようです。そこで座談会では日本近世史における検証を主眼に、新たな宝暦治水像を探求します。

近世史上最大級の治水工事

司会: 本日はお忙しい中、ご参加いただきありがとうございます。座談会では薩摩藩に普請の命令が下った経緯や、薩摩藩政史から見た宝暦治水の財政的な問題とその解決など、さまざまな問題を検証し、新たな宝暦治水像を探求していきたいと思います。

により、翌年二月二七日に工事をはじめました。対象区域は木曾三川下流域はほぼ全域に及び、工事は大きく二期に分けられます。

期は今日の災害復旧工事に相当し、輪中の堤防を修復しています。期は改修事業に相当し、中心課題である油島締切工事、大樽川洗堰工事、逆川締切工事などを実施しました。宝暦五年三月二十八日に工事は終了し、五月二日まで、幕府の検分を終えて引き渡され、完了しています。

総奉行平田鞠負は多額の費用を使い、多数の犠牲者を出した責任を負い、割腹自殺しております。犠牲者数は薩摩藩士九〇名、幕府方二名の九二名と言われています。

宝暦治水の改修の目的は、木曾三川下流域の地域特性上、三川分流にありましたが、完全に分流はできなかったのですが、三川分流への第一歩として、明治以降の近代治水の先駆けになったと評価できると思います。

江戸時代の治水行政

司会: 近世史上最大級の工事がなせ江戸幕府のもとで可能になったのか。林先生、その点をお聞かせください。

林: 中世以前は各地に領主の支配領域が小さく分立しており、特に木曾三川のように流路が広域にわたる大河川の場合、個々の領主では治水工事を行うのも難しいわけです。それが可能になったのは、江戸幕府の成立以降、統一政権としての幕府が、小領主や大名たちさらに農民たちを駆使して統一的に木曾三川全域の治水工事を一気に進められるようになった。統一政権の樹立が、最も大きな原因と言えます。

治水の方法には、公儀普請、手伝普請、国役普請、自普請があります。宝暦治水は御手伝普請で、幕府の命令と要請を受けて大名が自領と関係ないところで工事費用を負担して実施されました。公儀普請は幕府が自らの費用負担と責任において実施する工事で、国役普請は、幕府の権限と責任において、大名や農民町人らを動員し、費用も彼らに負担させるような普請です。

司会: 「治水四法」と呼ばれる近世の治水制度ですね。

林: 尾張藩の国役普請は、寛永十四年(一六三七)から免除されます。尾張藩は大藩ですから、領内の木曾川の管理は可能であるということでも免除を受けたようです。そのほか美濃の大垣藩、高須藩も国役を免除されます。大垣藩は、島原の乱に三〇〇〇人余りの兵を送って、軍役負担が重かったので、免除されただけではないかと言われています。

近世の薩摩藩政と財政的な課題

司会: 普請課役には軍役的な性格があったということですね。では黒田先生、宝暦治水



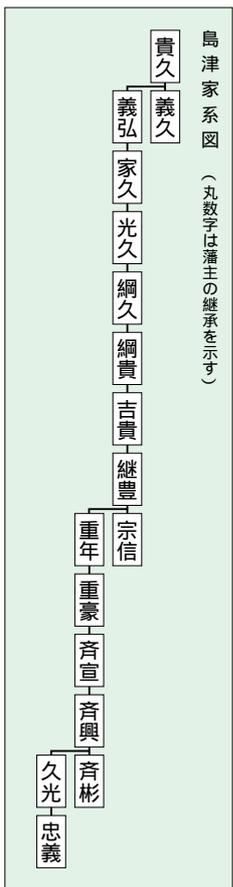
薩摩藩御手伝普請目論見絵図



座談会出席者 / 林順子氏(岐阜大学非常勤講師)、黒田安雄氏(愛知学院大学文学部教授)、宮本高行氏(国土交通省木曾川下流河川事務所 事務所長)、司会:大原純子(KISSO編集担当)

宮本: 宝暦治水は、わが国治水史上最大の難工事です。幕府は、宝暦二年(一七五三)二月二十五日に薩摩藩に御手伝普請を命じ、総奉行平田鞠負をはじめ九四七名の藩士

島津家系図 (丸数字は藩主の継承を示す)



前後の薩摩藩政についてお聞かせください。

黒田：宝暦といつ時期は、八代将軍吉宗からその子の家重、そして家治へと政権の交代期でもありません。幕閣の構成が変化し、幕府は行政的な官僚機構を再編し、財政が苦しくなる、年貢増徴や支出の減少など細かいような政策を打ち出しています。

一方薩摩藩は、享保から宝暦にかけて吉貴から継豊に藩主が受け継がれました。彼らは親子ですが、余りしくいっていません。吉貴は享保六年(一七二二)に隠居し、継豊が藩主となりますが、吉貴は継豊のお氣に入りの家老達を島流しなどで罷免しています。そのため、継豊は享保二年(一七二六)から国元にずっと帰ってこなくなります。

継豊は、国元の老父と深刻な仲たがいの状態になつていたので、その事情は、藩でも伏せていますが、隠居しながらも吉貴は国元ですべて実権を握っており、一方藩主の継豊は実権がほとんど握れない。病氣とか何とか言われていますが、要するに藩内で権力闘争があつただけだと思えます。必然的に藩政は停滞し、それがずっと続きます。そのついで流れの中で、次期の藩主宗信は、藩政の刷新をはかろうとするのですが、早世してしまつた。宗信のときに幕府から松平を名乗ること

を許されます。島津家が、幕府との関係を強

め、その後の日本史に大きな影響が出てくるわけですね。

司会：外様とはいえ、徳川家の親戚である松平の称号を与えられたのです。

黒田：もう一回は、重豪のときで、將軍との関係が深くなりまして、御三家や当時の老中がどうも薩摩の島津の力が大きくなつて困るから、ちやうと押さえなきゃいけないといつたことが史料にみえます。

司会：宗信から重年、重豪と藩主が継承されていくと、次に次第に力をあげていくのです。

黒田：宗信は重年の兄です。弟の重年は一門家の加治木島津家の当主でしたが、宗信が早世したために、結局、宗家を継ぎ藩主となつた。ところが、重年も早世したので、重豪が跡を継ぐといつ形になるわけですね。

司会：重年は宝暦治水を視察した藩主ですね。徐々に存在感が増えていく薩摩藩に、四〇万両もの御手伝普請がなせ命じられたのでした。

黒田：いろいろ扱え方はあると思いますが、国元に参勤交代の関係で帰つて来たといつたところがあるでしょう。もう一つは、吉宗から家重への権力交代が関係しているのだと思えます。

また、尾張藩との縁組が一回も不成立に

なつた。そのもれからとも言われていますが、私は縁組のことは余り関係がないのではと思つています。この辺のことは、強調するかによつて違つてくると思います。今のところ、あまりはしません。

司会：推測の域を出ないと。

黒田：吉貴は隠居後帰国して二五年間、継豊も吉貴の死後ずっと国元にいた状態です。さらにこの間、そんなに大きな課役を負担してないといつこともあります。大体順番からすれば、課役が回ってくる時期だったのかもしれない。ただ、後の財政に深刻な影響を及ぼした点で、宝暦治水は大きく響いていると思います。

司会：藩政の停滞や課役の状況など、さまざまな要因が考えられますが、その解明はこれらの歴史研究の課題なのでしょう。

では、論点を交えて、四〇万両といつた事業費用をどうに上画したのでしようか。薩摩藩は財政的な問題を抱えていたようですが、それをどうに解決したのでしようか。

黒田：参勤交代でお金がかかるとか、あるいは御手伝普請でかかるか言われますが、どの藩も当然参勤交代をやっていきますから、近世頭から財政が窮乏してくるのはいくらも同じです。むしろ、参勤交代よりも、江戸で生活する経費が大きく、二重生活の中で疲弊して、薩摩藩の場合には、俗に七二万石とか七三万石とか言われますが、実はその中に一二十万石の琉球高が入っています。ですから、実際は六〇万石くらいです。な、な、な、その高は米高ではなく、物高です。半分にするとい

大体三〇万石となります。一五万石から三

宝暦治水二五〇周年座談会

〇万石の実力で琉球を背景にした形で、恰好をつけているわけですから、それを支えた領民は大変だつたところだと思いますよ。

司会：精米以前のものが石高なので、結局はその半分くらいになってしまつて、財政的に大変な問題を抱えていたのです。

黒田：江戸時代の藩財政の実態をみますと、秋田藩が杉や鉾山で注目されますが、薩摩藩も商業立国といつ位置付けです。米に縛られ、大坂の商人や市場に縛られて、幕府に縛られるといつ形であれば、当然本来持っている実力を出すことはできません。商業立国だから、幕末に雄藩として大きな働きができた。琉球をおして中国とも通し、ほかの地域と交易を積極的に行つた。そのついでで付加価値をつけて実利を確保していく。特産の黒糖生産とかの問題も同じだつたと思えます。

司会：産業が奨励されて、その力を付けていたといつたことになるのでしようか。

黒田：そのついでという意味では、薩摩藩は日本史では、特異な地域といえるかもしれませんが、

司会：例えば、それまでも参勤交代などの費用を大坂商人に借り、さらに、最初は二二万両くらいと予測された工事費用の調達に、平田頼負らが奔走するわけですね。もうおまえのところに貸さないといつ商人もいたと思えますが、そんな状況でどうして普請費の調達が可能となつたのでしようか。

黒田：一つは、砂糖を押し売つたところから思えます。これはどの商人も一番欲しかったもので、それが最終的には、天保改革のときの唯一の推進力となります。もちろん、砂

宝暦治水250周年



安雄氏 (1940年生まれ)
 文学博士
 愛知学院大学大学院教授・博士
 九州大学大学院博士課程・日本近世史
 著書「佐賀藩の総合研究(共著)」、
 「藩史大事典(第7巻九州編)」、
 「新修名古屋市長史(共著)」、
 「幕末外交と南島雑話の成立」

糖は長崎から入ってくるものもありま
 すし、そのほか国産
 といつのもかなりあ
 りますが、薩摩藩で
 は、元禄以降、特に
 宝暦にかけましては奄美で換糖上納令
 といつて年貢を砂糖で取る。または琉球でも
 増産させるといつやり方をしております。

水行奉行高木家と尾張藩の縁組

司会：そついで産業が莫大な費用調達の保
 証となつたわけですね。こついで宝暦治水は
 開始されますが、当時木曾三川の治水はど
 こが管掌していたのですか。

林：木曾川の治水を統括していたのは美濃郡
 代ですが、実際に現場に出かけたのは、水行
 奉行の旗本寄合、高木三家と美濃郡代配下
 の堤方役人たちでした。どちらも土着性の強
 い人々です。

司会：郷土のような木曾三川の地勢に精通
 した人たちだったのですか。

林：もともと高木家の居所は今の上右津町
 の時や多良で、木曾三川からは離れていたの
 ですが、公平に地元民の意見を聴いて治水行
 政を行うにはむしろそのほうが都合が良か
 ったようです。



順子氏 (1965年生まれ)
 経済学
 岐阜大学非常勤講師・博士
 南山大学大学院博士課程・日本経済史
 著書「尾張藩水上交通史の研究」
 (清文堂、2000年)

糖は長崎から入つて
 くるものもありま
 すし、そのほか国産
 といつのもかなりあ
 りますが、薩摩藩で
 は、元禄以降、特に
 宝暦にかけましては奄美で換糖上納令
 といつて年貢を砂糖で取る。または琉球でも
 増産させるといつやり方をしております。

司会：高木家は、尾張藩とも随分関係があ
 ったといつていますが。

林：はい、高木家に水行奉行が命じられた翌
 年にあたる宝永二年(一七〇五)に高木三
 家の中心、西高木家の娘が尾張藩国奉行の
 遠山彦左衛門景供に嫁いでいます。景供は、
 享保の木曾山林政改革のきっかけをつくつた
 人物の一人で、木曾川についても発言力があ
 ったと思われまふ。木曾川は基本的には尾張
 藩の支配下にあるわけですから、水行奉行の
 高木家は、尾張藩と折衝することも多かった
 でしょう。尾張藩となくともうまくやしてい
 たい、高木家と遠山家の婚姻には、そついで
 思惑もあったのではないのでしょうか。

司会：文献上には残してはなければいけれど、婚姻
 関係などから、ある程度協力し合ったところ
 もあったと考えられますか。

林：間違いないとつとだと思います。実は、さき
 ほど話に出ました尾張藩国奉行の遠山景供
 の子どもの一人が、母の実家である西高木
 家に、養子として戻っています。そして彼、高木
 新兵衛篤貞は、宝暦治水の一の手で川通り
 御用を勤めました。宝暦治水に尾張藩は表
 だつた関わり方をしませんか、実は裏では何
 かと影響力を持っていたと思われまふ。

新田開発や地震などが水害要因に

司会：近世の木曾三川は洪水も多く、だか
 らこそ、大規模な事業が実施されたのです
 が、その当時の状況は、いかがだったでしょ
 うか。

宮本：木曾三川の下流域は、古来より、比較
 的最近まで水害の常襲地帯でした。江戸時

代には、軍事的、経済的な目的で行われた行
 為のために、さらに水害が増大しました。

江戸を拠点とする徳川幕府は、鈴鹿関ヶ
 原を戦略的な要所と定め、尾張藩の西側の
 木曾川に御囲堤といつ立派な堤を構築しま
 した。軍事的な防衛ラインの意味と同時に治
 水役割もあつたと思います。これができたこ
 とで、それまで東側に流れていた氾濫した水
 は西側に流れますので、西側の長良川や揖斐
 川に洪水が押し込められるといつた形にな
 りました。

財政的側面では、藩勢を拡大するために、
 石高の向上を目指した新田開発が行われま



高行氏 (1957年生まれ)
 建設省入省
 昭和三十五年四月
 山口県土木建設部河
 川課長
 平成十二年四月
 中部地方整備局木曾
 川下流工事事務所長

した。それまで氾濫原であつたところも、ど
 んん開拓されました。

司会：遊水地が水田化されたのですか。

宮本：しかし河道を広げるといつことがな
 ったので、その分、洪水のときに水が逃げると
 ころが徐々になくなるわけですね。しかも、家や
 田畑を守るために輪中堤をつくつていけばま



現在の木曾川下流域



すまず洪水の逃げるところが狭くなって、洪水のときに水かさが増すと、つまりように悪循環に陥り、水害がひどくなってしまうのだらうと思います。

司会：新田開発の二の副作用で、洪水が増えていたということですね。

宮本：一八世紀の最盛期には、輪中が最大八〇箇所くらいあったと言われており、御手伝普請が始まる少し前までの記録では一五年間に三回洪水があったと、一年に一回以上という記録も残っております。このため治水対策は輪中の住民や藩単位では解消できないというので、享保二〇年（一七三五）に井沢弥惣兵衛が永く紀州出身の治水技術者が、美濃郡代として笠松郡役所に着任。木曾三川を調査し治水計画を提案しています。この計画に基づいて宝暦治水が行われたようです。

以上の話以外に、別の観点から地域特性を申し上げておきます。この地域は、古来大規模地震を受けますと、その影響で時として地盤沈下を起しています。それによつて水害に遭いやすい土地になっていく、かつてはあの程度農業も安定的に営めるよい土地もあつたようですが、それがだんだん水害に襲われる土地になつていきました。

実は私が一番疑問に思いましたのは、高須輪中に高須松平藩が置かれていたことですね。これは格の高い藩で、尾張藩の分家である各門をなせ洪水常襲地帯、御囲堤の外に置いたのがわかりませんでしたが、専門家の方に伺つて、こういふ話です。

高須松平藩の起源は、一六八一年に尾張

藩の分家として独立した信州松平藩で、現在の長野県域に領地三万石を有していた。ところが、恐らく生産力が低い土地だということでもつし安定的に経営できる土地に移りたいというのを親元に泣きつき、元禄三年（一七〇〇）には、今の高須輪中に引越した。それが高須松平藩のスタートです。しかし、わずか七年後に宝永の大地震に見舞われます。

司会：宝永四年（一七〇七）、最後に富士山が噴火したという、有名な地震ですね。

宮本：この地震は大変大きなプレート型の大地震で、地盤が二〇cm以上下がり、それ以後水害が増えて不毛の土地になつていきました。記録があります。

尾張藩の治山治水政策

司会：地震による地盤沈下と洪水とは密接な関係があるわけですね。洪水を考えると、まず治山治水、山を治めなさいという考え方がありますが、当時の木曾川の上流域、木曾山はどんな状態だったのか、木曾山は尾張藩の管理でしたか。

林：尾張藩は、寛文と享保の二回にわたつて大きな林政改革を行っています。特に享保改革は、林山資源を尾張藩の恒久財源として保護していく。つまり、留山を作つたりしています。

司会：留山は入山が禁止された山ですね。**林**：入山が許された山にしろ、尾張藩はいわゆる木曾五木と言われる停止木、つまり伐採禁止の木種を指定しています。このほか松なども、伐採には許可が要りました。これ

は林政改革としては二度目となる享保改革の話で、一度目の寛文の林政改革のときには、尾張藩用の材木伐出しはむしろ増加しています。この頃はまた、山林荒廃は洪水発生の原因としては深刻に受け止められ、はなかつたようです。

司会：江戸という平和な時代を迎え、城下町の再建が起り、その資材として木曾山の木が刈りだされた。それが洪水の原因にもなつていのでしょうか。

林：城下町や寺社建設などのため、一七世紀前半には全国的な建築ブームが起き、木曾山からも大量の材木が伐り出されました。木曾材の伐出し、販売は、尾張藩の収入にもつなぐりますので、一七世紀中は、木曾山荒廃に対する尾張藩の認識もまだ甘いところがありました。本格的な治山が進んだのは、一八世紀の享保林政改革以降のことです。よいのではないですか。

未曾有の公共事業に湧きたつ地元

司会：宝暦治水は総工費が四〇万両だと言われています。現代の事業と比較してどのような規模だったと所長はお考えですか。

宮本：当時の一両は現在に換算すると七万円から一〇万円くらいと言われています。仮に一両を一〇万円とすると、総事業費が四〇億円になります。これをどう評価するかどうかですが、宝暦治水では、夏場は工事できなかつたので、実質約半年ぐらいの期間で工事をしているわけです。現在の長良川河口堰を例に挙げますと、最盛期でも、年間の予算が一五〇億円でした。これも非洪水期の半

年ぐらいです。ですので、大体同じです。同じ期間で、しかも機械力の乏しい昔に、四〇億円相当ですから、宝暦治水の工事の規模の大きさが、つかい知れるのではないかと思います。

司会：四〇億円もの公共事業が起きるとなると、土木の人足を集めたり、支払いをしたり、大変な苦労があつたと思われま。その辺を林先生、お聞かせいただけますか。

林：宝暦治水の前から、幕府が行つた普請事業のなかで、御救いという言葉がよく使われるようになります。住民の経済的救済が普請の目的の一つとされるのです。

司会：地元の人たちを積極的に雇用していたのですか。

林：例えば、寛保二年（一七四二）関東の利根川はじめ各河川流域で大規模な水害が起き、幕命によつて多くの西国大名が普請工事に駆り出されました。そのときにも、御救いが工事的目的の一つとなりました。老人、女子どもでも、普請場で土を運べば賃金をもらえると、困窮した人々が押し寄せました。混雑のなかで娘さんが気絶をし、その普請場を担当していた岡山藩がわざわざ藩医をつかわして介抱したり見舞金を出したり、といった事件まで起きています。駆り出された大名たちも、地元民に何かと気を使っていたわけです。しかし、村人たちが参加する村請負での普請では、作業効率も低下します。この関東における普請の、藩吏たちの地元民への配慮として、村請負という工事方法は、宝暦治水にも共通することでした。

司会：技術職ではなく、素人ですから効率が

宝曆治水250周年



悪いのですね。

林：女子どもでござる。とていへば少量の土運びくらいですから。関東で行われた普請工事でも、駆り出された西国諸藩が音を立てて、結局、専門技術を要する部署については有力農民や町人などの専門業者が担当する町方請負が採用されたりしました。宝曆治水でも、幕府は薩摩藩に、御救いの名のもと、村請負の工事を強い、それによってもろろん地元住民は経済的に救われるのですが、薩摩藩としては出費が大きい。そこでやはり、高度な技術を要する部分だけについては町方請負の採用が許されました。

困難を極めた資材調達と搬送

司会：薩摩藩の技術者を雇用すれば藩にお金が還元されますが、地元にお金は何のメリットもないこととなりますね。しかし、それだけの大業が起れば、人手不足はもちろん、材料や船の調達など大変だったと思います。すけれども。

林：石材は、油島締切り工事だけでも約一万坪、全体では五万坪を要したと言われています。石材の調達先は、近いところでは石津郡つまり高木家の居村の近くです。遠方では長良川の岐阜上流付近です。この石材調達については、なぜか地元民が運送作業への参加を嫌がり、作業が遅延したようです。材木は木曾川支流の可見川付近などの幕府領から伐り出された松が使われました。その運送には、どうしても木曾川を通らざるを得ず、しかも尾張藩は木曾山の松を、伐採規制の対象としていますから、史料には残っていないも

の運送時には間違いない、木曾川各所の尾張藩川番所で検閲を受けたでしょう。それもまた、薩摩藩にとっては面倒事のひとたしと思われれます。もしも、この尾張藩家臣と縁戚関係を結んだ高木家が、うまく立ち回した可能性も考えられます。

宝曆治水の土木技術的評価

司会：では土木技術の面ではいかがだったのでしょうか。

宮本：木曾三川の複雑な流れをできるだけ三つの川に分けていくという発想は、基本的に明治改修に引き継がれておりますので、思想としては先駆的なものと評価できると思います。ただ、当時の治水技術の考え方には、今日から見ると少し至らないところがあったと思います。

その最大のものが洪水の流量という概念がなかったことだと思います。水が流れている面積と、ドドを合わせた流量を評価するといったことがなかった。そのため、農民は開発した新田を守るために輪中堤防を高くしていく。そうすると、水の流れるところがどんどん狭くなり、洪水がさらにひどくなる。といったことを繰り返したと思います。

さらに、もつと甲し上げますと、川の水は細かい土砂も一緒に流す働きがあります。この評価も抜けていたかなというところ。大樽川に洗堰をつくりました。それによって従前よりも長良川の水かさが少し高くなり、また、その影響で従前よりも流速が遅くなりました。結果、その中に含まれている土砂がたまるようになっていきました。そのために川底が高くな

って中流の方で洪水が発生する、という事態も起ったようです。そういったことが当時の治水の問題点だったかと思えます。一方、薩摩藩の仕事ぶりはどうだったかと言いますと、工期が大変短かった、工事規模が大きかった、難しい工事も多かった、ということから判断しますと、施工能力は極めて優秀であった、ということではないかと思えます。

実は五月二五日に、鹿児島市内で恒例の薩摩義士の慰霊祭がありまして、私も鹿児島へ行ってきました。その折、鹿児島湾の北にあります国分市でもおもしろいことを伺っていました。

宝曆治水の二〇〇年ほど前、現在の国分市一帯を流れている天降川の河道付け替えと新川開削という大工事を実施したようです。その結果、干拓地が生まれ、豊かな穀倉地帯になって薩摩藩の財政を支えたようです。

市長さんの個人的なお話ですが、薩摩藩に白羽の矢が立ったときの検討の判断材料の一つには、こういった天降川の大工事もやっていたという実績も、あるいは一項目に入っていたかもしれないということでした。実際、明治改修を立案したアレーケは、油島の締切堤や石田には猿尾という水制があるのですが、それらを変興味深く観察したようですから、当時の技術に対しては評価していたのではないかと思えます。

司会：薩摩藩に固有の技術があった、ということですが、その点を黒田先生にお伺いします。
黒田：土木技術史の研究は一番遅れている分野だ、という思いです。

尾張藩や美濃の新田開発は江戸時代の早

い時期に行われていますが、薩摩藩は遅れています。宗教的あるいは経済的な利害関係が存在して、新田開発の実施が遅れたようです。所長さんがおっしゃったように、比較的古い時期に開発されたことで、下流の地域は江戸時代も天保改革のときに、干拓事業を行っていました。

一方の特徴として、早い時期からの薩摩と中国の交流が挙げられます。江戸時代に入り、明から清への交代期になりますと、明朝に深い関係は清朝の中国へ帰れなくなり、商人とが医者その他に、鉱山技師とかもかなりいます。そういった風土ですから、固有の土木技術をもった人々も多くいたと考えています。

もつと、領内各地に金山があり、た、この金山は元禄の頃までほとんど掘り出されています。北薩の永野や串木野の芦ヶ野等に領外から多くの金堀り人が入っていました。串木野などは耕地にくらべて、人口が多かった。ということもあり、江戸時代中後期になると、開墾請負み的な形で人々が領内各地に出掛けています。江戸時代中期から明治まで続いた伝統です。開墾・土木については、それなりの技術があったようですが、文書的な裏づけが難しいですね。

司会：土木技術の歴史的な検証がまだできていない、ということですね。ただ、金山や新田の開発には、長く滞在した中国人の技術も活用されていたのではないかと。

黒田：薩摩藩の場合、寛永時代よりも後のころまで、侍の分限帳に中国の名前で堂々と載っているのです。鎖国になつていく時代に載

いるべからいですが、郷村にはまだまだそういった関係の人が多かったことが想像できます。

悲劇はなぜ起こったか

司会：宝暦治水が無事竣工し、総奉行の平田朝貞が自刃をしますが、その死因についてはいろいろな言われております。それにしても九〇名に上る犠牲者、それは薩摩藩士及び幕臣にもあつたといつていますが、当時の状況を推察することはできるのでしょうか。

黒田：宝暦治水を語るとき、義士といふ言葉が出てきます。自刃をしたといふことが一つの要素、犠牲が非常に多かつたといふことがもう一つの要素、そういった中で義士といふ評価が生まれてくるわけです。

私は名古屋へ来てから薩摩藩の江戸の方のお寺や、明治維新のときに上京してそのまま東京に居ついた人の墓などを丹念に調べています。大田寺の過去帳をみると、宝暦の同じ治水工事の時期にたくさんの方が亡くなつて居るのです。最初はそんなに深く考えませんでした。この前ある史料をみてみると、宝暦四年の八月から九月にかけて江戸の芝罘邸で熱病がはやり、およそ二〇〇人が亡くなつたといふ記述がありました。

一方、薩摩義士の死者は何名かといふ問題はありますが、とりあえず八四名とします。うち病気で亡くなつた人三三名、切腹した人五二名、これで八四名です。ところが薩摩の役人が幕府に健康状態を報告している史料があります。それを見ると、工事に従



薩摩義士墓所(大中禅寺境内・鹿児島市)

事していた小奉行三二人のうち七人、徒士一六四人のうち六〇人、足軽三三〇人のうち九〇人、合計四二六人のうち一五七人が病気になるということが書いてあります。

司会：ほぼ三分の一が病気になるわけですね。

黒田：さらに数十人が病死したと、藩の責任者が幕府役人に届けたと史料もありません。これらの事実は、切腹した人たちのほとんどは、何らかの形で病気がかかつたといふことです。切腹の背景には、体力がなくなつた、あるいは下痢気味になっているとか、諸士がかなり追い詰められた状態にあつたと考えることが出来ます。

宝暦治水後の薩摩藩の再建築

司会：多くの犠牲を払いながら、宝暦治水は

終わったわけですが、薩摩藩は重年の次の重豪の代になり、また大きな借財を抱え、藩政も変わっていきました。最終的には、たくさん借財をどういついふうに戻還しようといつて、近代を迎えたかといつてを説明したいただけますでしょうか。

黒田：薩摩藩の有名な財政改革、天保改革のときの借財は五〇〇万両と言われています。史料によれば、文政九年(一八二六)、天保改革の直前ですが、そのときの借財は一七二万両です。それが天保改革のときに、どうして五〇〇万両になつたのだらうかといふことが一つの疑問として残されています。

天保改革の直前、江戸藩邸の経費は大体九万両、宝暦のときは恐らく六、七万両くらいだつたさうと思つて居ます。江戸藩邸の経費の五、六年分を治水工事にき込んだのですから、宝暦治水での借財がすつと後まで尾を引くことになり、藩債が累積しました。

しかも、藩財政が悪化するなかで、重豪の娘が一橋豊千代と婚約し、その後一代将軍家斉の御台所になります。

司会：將軍のお義父様になつたわけですね。
黒田：恰好をつけなければならぬけれども、足元の財政がぐらぐらして居るといふ中で、それが難しいので、これまでの薩摩のやり方では駄目だといふことで、質素倹約より産業開発に積極的に取り組むわけです。俗にいつ開化主義への政策の転換です。ところが、明和から寛政期にかけては天災飢饉をはじめとした災害が非常に頻発しました。一方においては、娘を將軍家に入れなきゃならない、天災飢饉はあるけれども、そのお金も

充当しなきゃならない。どちらをとるか、結局、娘のためにお金をつき込んだわけですね。ですから、産業基盤が荒廃してしまいました。遅れた地域で先進的なやり方をやるものから、首が回らなくなりましたが、メリットもありました。それは將軍家とつながります。その後の天保改革から幕末にかけて、非常に大きな役割を果たすことになりました。

司会：將軍の御威光を背景とすることができたのですか。
黒田：重豪は隠居した後、藩政の実権を握り、政治改革をします。一橋家、將軍とのつながり、そういった中で政治工作を活発に展開しました。

財政改革を行うために、薩摩藩には柱が二つあつたと思つて居ます。中国の物産です。これをどう生かすといふことが一つ、そしてもう一つは奄美と琉球の砂糖です。この二つが藩の切り札となりました。

政治の世界と経済の世界をつましく使い分けながら、重豪は膨大な藩債の返済のために、幕府に長崎での琉球、すなわち中国の物産の販売を認めてもらいます。ところが、利益が上りありませぬ。そこで公に認められたものを長崎で売りながら、それと似たようなものを例えば新潟とか松前といつて、そこに直接に持って売り捌きます。幕府の長崎会所の活動を無視し、密売をしているわけで、当然幕府でも問題になります。しかし、何せ御台所の御実家ですから、將軍が死なないうちは手をさせなかつた。

それでも二〇〇万両近い藩債は、うちち



調所広郷の銅像（鹿児島市天保山）

さすちもいかな。結局、踏み倒さなきゃいけないというところになるのです。今までの研究ですと、借財五〇〇万両を踏み倒したと言われて

いますが、実際は五万両でしょう。例えばこの時期それまでの借金証文を帳簿に切り替えたと言われています。確かにそうだと思いますが私は大坂商人にもちゃんと納得できるところがあったから、帳簿の書き替えに応じたと思っています。大坂商人に元金と利子の合計五〇〇万両を二五〇年間にわたって確実に返すというものであったのです。

このため、砂糖の品質を良くするやと、もとも協力を厳しく取り締まるといって有名な砂糖の専売制が強力に実施されました。

司会：その責任者が調所広郷（しよしひろちか）一七七六～一八四八だったのですか。

黒田：そういう一つの大きな方向づけを最終的に決めて、これをずっと永久にやりなさいと言っていて重豪は「く」になります。当時の史料には「永年」と書いてありますから、一五〇年間は「永年」と書いてあります。大坂商人が信用するようになった強固な改革体制をつくらなければならなかった。

司会：重豪の遺言みたいなものを調所が守り、一〇〇万両という借財、利子分を合わせ

た五〇〇万両の藩債を処理しようとしたのですか。

ようか。

司会：將軍の岳父になられたというところでこの時期から幕末の原動力となる力が蓄えられ始めたわけですか。

黒田：その間、二度も大きなお家騒動があったりしますが、有名な幕末の藩主斉彬の正室も、やはり一橋家から迎えています。その点でもまた、斉彬が中央で活躍ができる人脈ができていったわけですね。

今後の治水事業に寄せて

司会：宝暦治水で借金は抱えられなくても重豪以降、島津家は着実に日本の原動力になっていく体制を整えたといつことですか。

黒田：最後になりましたが、今後の治水事業の展望について、先生方からお話をいただきたいと思いますか。

林：最近、堀川をきれいにする活動が市民の間で高まっています。同じように、木曾三川でも、その恩恵をつける濃尾の人たちの目を川に向けさせることが大事だと思います。新田開発にして山林開発にして、実行するときに、短い期間での利益をみてしまいます。今がよければ良いというのではなくて、たとえば子どもたちの日常に川に触れ

に親しみ、そしてその怖さ、すばらしさを体感できるようなことを目指してみてはどうか。将来につながる治水行政はそんなところからスタートするのではないかと思います。

黒田：鹿児島島の城下を流れる甲突川に絡ませてお話ししたいと思います。しばらく前に集中豪雨で甲突川が大氾濫しましたが、私どもの幼いころにはそんなことは余り記憶に

ありません。どうしてだろうか。一生懸命考えてみますと、分流という作業が暗渠の関係で我々がちよと足を突っ込んだり、あるいは魚を見たりするような川が少なくなっている。川がたくさんある必要はないのですが、大きな川を補充するよつな川を活かせるということは活かすよつな形にしていたければよいと思っています。

宮本：この地域は水害と地震に見舞われてきたところで、両者は非常に密接な関係にあります。さらに一昨年来、東海地震、東南海・南海地震への対応がクローズアップされています。私も事務所としても、今後は治水対策だけではなくて、地震対策にもしっかりと取り組んでいきたいと思っています。

既に改めて堤防等の河川管理施設の耐震性を検証して、必要な対策を考えると、専門家の委員会もついております。それから、阪神大震災のときに、有効性が明らかになりました舟運、船を災害発生時に活用するというのがございます。治水に戻りますが、昭和に入ると、伊勢湾台風の復旧事業や長良川河口堰の建設、それに関連した河川改修事業が今日まで進行し、治水安全度は一定し

べルにまでは達してきているといつことですね。しかし、治水事業には「打たれては」いつものはございませんし、またまたやらなければならない事業が残っております。特に木曾川、長良川、揖斐川の三川のうち、一番西側の揖斐川の治水が遅れております。現在も重点的に堤防改修、河道掘削等もやっております。岐阜県の上流では徳山ダムが現在建設されているといつことですね。

実はそれが非常に歴史的な意味があると思っております。平成一九年に徳山ダムが完成しますと、それにあわせて下流の河川改修も進みまして、ようやく揖斐川と長良川と木曾川の三本の治水安全度が大体同じレベルになることになりまして。

さらに、治水安全度が一定水準まで来たといつことで、一昨年来、「夢普請」を提唱しております。これは地域の住民の方、自治体、国等と一緒に連携協働して、歴史と夢と潤いのある魅力ある水郷地帯の創出を目指しています。

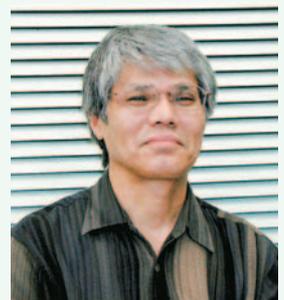
最後に、海津町、平田町、南濃町の方々が、市町村合併を契機に、宝暦治水をNHKの大河ドラマに誘致しようといつ運動を展開されております。ぜひ実現してほしいと願っております。やみませんが、市町村合併も一つの起爆剤となつて、それぞれの自治体の地域づくりの夢の実現が加速し、それと我々行政の者が連携協働いたしまして、安全で魅力ある水郷地帯づくりを目指します。夢普請が実を結んでいけば素晴らしいと期待しております。

司会：本日は長い間、ありがとうございました。



奄美諸島の黒糖栽培と薩摩藩支配

名瀬市文化財審議委員 弓削政己氏



弓削政己氏

一九四八年生まれ
鹿児島県大島郡知名町出身
大島郡大和村誌編集委員
大島郡瀬戸内町誌編集委員
論文、奄美から見た薩摩支配
下の島嶼群」など。

琉球、奄美と薩摩藩

奄美は一五世紀中ごろから琉球王国統治下であった。薩摩藩は、慶長一一年（一六〇六）には領土拡大として大島支配について談合をしていた。一方幕府



開鏡（ひらとみ）神社 鹿児島県大島郡大和村 わが国糖業の元祖である、直川智翁を祀った神社

の承認のもとに中国交易独占のための琉球王国の統治方針もあり、それが慶長一四年（一六〇九）の琉球・奄美の進攻となった。

米と黒糖

当初、藩は奄美の貢租を米としていた。そのため水田用水のための溜池づくり、新田開発に力を注いだ。寛永一〇年（一六三三）の勤農のため大島に派遣された有馬丹後純定や現龍郷町の田畑佐文仁の新田開発などがみられる。宝永三年（一七〇六）、貢米が不可能な場合は粟・特産品の尺苴・芭蕉、小麦、黒砂糖を代わりにしてよいという状況であった。

黒糖生産とともに貢租として黒糖の比重が高まり、延享二年（一七四五）、貢米は全て黒砂糖とされた。その方法は、黒砂糖を漬が買い上げ、その量を米で換算し、そこから貢米相当を差し引いた残りを米で島民に支払うものであった。しかし、付加税などで実際は島民の多くは米を食するとはできなかった。当初、奄美の五

島中、喜界島、大島、徳之島、三島で黒糖生産の砂糖キビ栽培がされたが、幕末には奄美全体に栽培された。それまでは奄美の沖永良部島、与論島は米中心の施策で奄美の砂糖キビ栽培の三島への米の供給地の役割を担わされた。

黒糖は、藩の大きな収入源とされた。藩利潤は文政二年（一八一九）から一〇年間で一三六万六千両、天保二年（一八三〇）から一〇年間で一三五万両、弘化二年（一八四四）から一〇年間で一四九万三千両余であった。明治二年（一八六九）の鹿児島県特産品の入金額約一七二万両のうち、黒糖は八五万五千両で、内、奄美の黒糖は六一万五千両、三五七%に上るほどである。この黒糖生産で奄美は階層分化が進み、百姓の身売り、逃散による大量の家人（債務奴隷）が発生した。

黒糖栽培の始期

伝承としては慶長年間に現大和村の直川智が琉球へ行く途中、中国へ漂着し

砂糖キビ苗と黒糖製糖法を持ち帰りひろめたとある。しかし、産業として成立したのは、元禄一年（一六八八）か翌年、現大和村の嘉和知、三和良が琉球へ行きキビ植付、砂糖製法稽古以後である。

宝暦治水時の奄美

宝暦四年（一七五四）、徳之島の東西両間切の最高統治者である在地役人の与一人名、また横目、目指役が前年の田の収穫高について鹿児島まで呼び出されるといふ異例のことが起きている。また同じく徳之島では数年来の飢饉に続き、宝暦五年（一七五五）の台風で男女三二、二〇〇人余が死亡し、一、七〇〇人程が大島へ逃げ去り、牛馬二〇〇〇頭余が死んだ。藩はその手当てとして琉球から飢饉米を五〇〇石借用させている時期である。

宝暦治水の工事費には奄美の黒砂糖がかなりのウエイトを占めていたと推察できるが、その後ますます増加する薩摩藩の負債返済に大きな役割を果たしていたのである。

歴史は時空をこえてつながる

大島郡和泊町歴史民俗資料館 先田光演氏



先田光演氏
 さきだ みつひのぶ
 一九四二年、鹿児島生まれ。
 小中学校に勤務、平成一五年
 三月中学校長を退職。
 著書、奄美の歴史とシマの民
 俗など。

一五〇年前の木曾川下流域の歴史的な治水工事がこゝ鹿児島県の南端の小島沖永良部島の歴史にとどのような関わりを持っていたのか、宝暦治水二五〇周年を記念して関係者が奄美諸島の歴史探訪で来島された。

昨年は奄美諸島としては日本復帰五〇周年記念の年であった。太平洋戦争の敗戦により、日本本土から分離されてア



和泊町歴史民俗資料館展示風景



岐阜市と交流した知名町の学童文集

メリカ軍政下にあった奄美諸島の島民は民族運動として日本復帰運動を立ち上げ、激しい運動を展開していった。

一〇の運動の結果、昭和二十七年に入ると奄美諸島の日本復帰実現の兆しが見えてきた。ところが、同じ奄美諸島、奄美大島・喜界島・徳之島・沖永良部島・与論島の中で南部に位置する沖永良部島と与論島は復帰から除外されるといつ新聞報道が伝えられ、島民は寝食を忘れて熾烈な運動に明け暮れた。町長を東京に急遽派遣して、各方面への陳情を繰り返した。

一〇のよきな復帰運動のなかで特筆すべきことは、児童生徒が日本復帰の願いを作文に託して本土の報道機関や教育関

係者へ送り、本土の子供たちはばかりでなく、大人の世論喚起にも大きな効果をもたらしたとである。

当時の岐阜市長、東前豊は本島の出身者であった。島の子供たちは四〇余通の日本復帰の作文を東市長に送っている。市長はこれらの作文を各母学校に配布して読み聞かせを進め、さらに激励の手紙を書いてもらった。そして子供たちの温かい励ましの手紙は奄美諸島へ送り届けられている。手紙ばかりでなく、学用品や本や雑誌も送られてきた。島の子供たちの喜びはたとえようもなかった。

昭和二十八年二月二十五日、悲願の日、日本復帰が実現した。もちろん南部一島もいっしょに本土へ復帰することができたのである。

復帰が実現すると島の学校に救援物資が送られてきた。岐阜市から送られてきた救援物資の手紙は次のように綴られていた。

「江戸時代、薩摩藩が木曾川の治水工事をしてくれました。たへん難儀なお金のかかる工事でしたが、その財源となつた

のは奄美の黒砂糖であったことを先生から聞きました。自分たちが今豊かな暮らしの出来るのは、奄美の人々のおかげであることを知ったので、その恩返しにと皆でお金を出しあつて買ったものです。」
 (大城小学校創立百周年記念誌より)
 今から五〇年前、木曾川治水の縁で岐阜市の子供たちと日本復帰を果たした奄美の子供たちがつながっていたのである。

宝暦の治水工事は、その財源を奄美諸島、奄美大島・喜界島・徳之島の黒砂糖に求めた。この治水工事をきっかけに莫大な借金を抱えた薩摩藩は、再び黒砂糖の収奪によつて天保の改革を成功させ、倒幕運動の資金を生み出していった。その後、富国強兵を推し進めた藩主島津斉彬は、沖永良部島にも黒砂糖を生産上納させて資金源にしたのであった。

このように歴史の糸が遠く離れた濃尾平野と奄美諸島を結びつけていたのである。その不思議な糸が宝暦治水二五〇周年に再び確かめられたのであった。

(沖永良部郷土研究会長)

宝曆治水に学び、

その偉業を後世へ。

長良川・揖斐川の背割堤に沿って、深い緑を香らせる千本松原は、薩摩義士が故郷から取り寄せた日向松を植えたもの。台風による倒木や枯死などの災害を乗り越えて、その偉業を今に伝えていきます。明治初期に始まった顕彰活動も二五〇年の歳月を超えさらに未来へ。宝曆治水を遂行した崇高な精神は、人と自然との共生を、私たちに改めて問いかけているようです。

地元の義士顕彰

宝曆五年五月二日に全てが完了した宝曆治水。しかし、その顕彰と薩摩義士の慰霊は、明治という時代を待たねばなりません。この御手伝普請に費やした莫大な費用、そして多数の殉死者。余りに多くの犠牲を払った治水事業は、それらの理由などから薩摩において評価されず、恩恵を受けた木曾三川下流域の地元民が、「薩摩様」とわずかに口伝えする程度でした。

明治に入り顕彰を初めて開始したが、一〇代西田言兵衛です。西田家は三重県桑名郡多度町の素封家で代官を務めた家柄であり、宝曆治水当時、その祖先は平田鞆負の良き相談顧問方として、協力を惜しみませんでした。「薩摩藩の恩を忘れるべからず」。三代言兵衛が当時の状況を丹念に記した記録は、西田家の家宝として代々秘蔵されましたが、残念なことに、明治九年（一八七六）の伊勢暴動により焼失しています。

この事実が、一〇代言兵衛の義士顕彰への始まりです。

義士の事蹟顕彰を志した言兵衛は、明治一七年（一八八四）頃より史跡、墓地、資料の収集に奔走する一方、記念碑建立に向け、精力的な活動を行いました。上京を何度も重ね、島津公爵家や松方伯爵家などに協力を要請。また地元の官庁、一般の人々の協力を得て、宝曆治水工事中最も難事であった四ノ手油島締切堤防の先端に、「宝曆治水碑」が建立されました。

碑の除幕式は、木曾三川下流改修明治改修による木曾三川分流がほぼ完成した明治三三年（一九〇〇）四月、時の総理大臣山県有朋、内務大臣西郷従道をはじめ数多くの高官の参列を得て、厳粛にしかも盛大に挙行されました。

宝曆治水碑建立を端緒に、顕彰活動が活発化。明治三年には大樽川洗堰跡に「薩摩堰遺跡」の碑を建立、昭和三年（一九二八）には、薩摩義士二一名が

眠る海蔵寺に忠魂堂を建立、昭和一三年（一九三八）には、治水神社を創設。同年五月二五日には創設奉祝祭が国及び県の高官臨席のもと関係者多数の参列を得て盛大に挙行されました。

鹿兒島県の義士顕彰

鹿兒島県での顕彰活動が始まったのは大正六年（一九一七）、「薩摩義士顕彰会」が結成されました。

顕彰活動が遅れた大きな原因は、旧藩時代はおろか明治の初めまで、工事については、一切他言すべからずとして、厳重な緘口令が引かれていたためです。幕府への配慮が大きな原因だといわれています。また、治水資金調達のため藩当局は過酷なまでの重税を課し、藩民に怨嗟の空気があったこともいけません。しかしながら岐阜県の顕彰活動の影響を受けて顕彰活動の機運は高まり、大正六年には最初の薩摩義士顕彰祭典が開催されました。大正九年（一九二〇）には、鹿兒島市城山

麓に、宝曆義士碑を建立。この碑の中には、幕府の役人であり切腹した内藤十左衛門、竹中伝六の両名が合祀されています。これは薩摩藩の精神、敵味方差別なき供養が受け継がれたものだと考えられています。

昭和二年（一九四七）には、平田鞆負屋敷跡に平田公園を建設。昭和二九年には二〇〇年祭記念式典が平田公園で行われました。式場には平田鞆負の子孫平田正風氏（当時一七歳）をはじめとした遺族も出席。この年、平田公園に平田鞆負銅像も完成し、除幕式が行われました。また、記念事業のひとつとして、鹿兒島市長が治水神社境内内の千本松原から持ち帰ったヒメ小松七本を記念植樹。翌年には平田翁にちなんで命名した平田橋が完成。平成六年には薩摩義士二四〇年祭、同九年には大中寺に薩摩義士墓建立、平成一六年には二五〇年記念祭が盛大に挙行されました。

華々しく挙行された二五〇年記念式典

宝暦治水二五〇年治水神社春季大祭 四月十五日



除幕式

が完成し、碑の除幕式が行われました。その後、大鼓の演奏、薩摩古武道・薬丸野太刀・示顕流の演舞、詩吟などが奉納されました。また、海津町の小学生のグループが宝暦治水や明治改修の研究成果を発表しました。

薩摩義士二五〇年目の凱旋事業出発式

「薩摩義士二五〇年の凱旋」の出発式が治水神社境内で行われました。これは、一般公募者を含めた海津町青年のついで協議会会員らが、薩摩義士が歩いたルートを逆に自転車で行くというもの。故郷へ戻れなかった義士の思いを果たすとともに、義士の偉業を称えようとする企画されました。リレーは一ヶ月後、平田朝負の命日の五月二五日に鹿児島市平田公園で開催された薩摩義士二五〇年祭式典前にゴールしました。



御輿の奉納



研究発表する地元の小学生グループ

宝暦治水工事に殉じた平田朝負他薩摩義士八〇余名に感謝を捧げる治水神社春季大祭が、岐阜県薩摩義士顕彰会会長 梶原拓岐（岐阜県知事）の主催のもとに行われ、義士の遺徳を偲びました。この日、「宝暦治水工事犠牲者の碑（九二名）」



自転車リレーの皆さん

二五〇年忌追悼法要 桑名市・海蔵寺 四月十五日



海蔵寺の法要

人が参列。薩摩藩主の直系子孫、島津修久氏は、薩摩義士の崇高な精神は、今も脈々と受け継がれている」とあいさつしました。法要後は、初めて参列された平田朝負の子孫、平田朝久氏から贈られた平田家の家紋を披露。桑名歴史の案内人・初代会長の加藤勝己氏の記念講演も行われました。

海蔵寺は曹洞宗の古刹です。薩摩義士の墓石「四基」が現存し、桑名市の指定史跡となっています。法要は毎年、平田朝負の命日に、地元の顕彰奉賛会が営んでいます。しかし、今年には鹿児島市の慰霊祭がこの日に行われることから、二五〇年忌追悼法要は、例年より一ヶ月早い四月に実施しました。藩士の子孫や鹿児島県顕彰会関係者ら二〇〇



焼香の列をなす人々

宝暦治水顕彰活動

宝曆治水二五〇年とついでに 記念すべき年に寄せて

宝曆治水の顕彰活動を契機に、昭和四十六年（一九七二）七月、岐阜・鹿児島県両県は姉妹都市盟約を締結しました。

県同士の盟約締結は、全国でも初めてのこと。以降、教育・文化・経済面はもちろんのこと、顕彰活動の交流も活発化しています。

そこで、岐阜県の顕彰活動の求心力となっている、治水神社の宮司 山内久和氏、海蔵寺の任職田宮正宣氏、平田家直系子孫平田正風氏と、鹿児島県薩摩義士顕彰会の島津修久会長にお話を伺いました。

異国の治水事業に命を賭した薩摩義士の精神に学ぶ

治水神社 宮司 山内久和氏

明治中期から後期にかけて、木曾三川下流域では顕彰活動が活発になり、神社創設の動きも出てきました。大正一四年（一九二五）には有志により宝曆治水奉賛会が設立され、広く全国に基金を募り、建設への動きが具体的にになりました。宝曆治水の犠牲者は八〇余名といわれていますが、その方たちを「祭神に



と」いうことで、内務省へ幾度も陳情を重ねています。しかしなかなか許可は下りません。多くの人々を「祭神にすること」ができないというのが大きな理由だったようです。結局、治水神社が創設されたのは昭和一三年（一九三八）四月、総奉行平田鞆負を「祭神とすること」で許可されました。昭和二年に着工したにも関わらず、十数年の歳月を擁したのはいくらも「うした事情があったからなのです」。

現在は、毎年四月一五日に例祭春季大祭を、一〇月一五日には例祭秋季大祭を開催。宝曆治水二五〇年を迎えた今年は、関係者約三千人が参列して義士の遺徳を偲びました。心男は、大江地区外浜の瀬古市郎さんが選ばれました。瀬古さんの数え年は平田翁が自刃した五一歳、神男をあえて心男としたのは、平田翁の精神に学ぶため。殺伐たる現代だからこそ、異国の治水事業に命を賭した義士の精神を学ぶ

必要があるのです。式典では海津町の小学生のグループが、宝曆治水や明治改修などの成果を発表していますが、子どもたちが中心となって義士の精神を地域へそして未来へ伝えていくべきことではないでしょうか。治水神社は薩摩義士の史蹟である千本松原の一面にありますが、「ここから見る日の出は本当に素晴らしい。温暖化や酸性雨、外来の害虫など環境破壊が進む現代だからこそ、治水神社の千本松原として、自然との共生を伝えていきたいものです」。

助け合いの心を学びながら、薩摩義士の心を語り継いでいく。

桑名市 海蔵寺住職 田宮正宣氏

明治二六年（一八九三）一七世任職時、本慈船たちも「せんとせんと和尚が寺の過去帳を整理中、薩摩藩士埋葬寺送り」の古証文を発見したことから、宝曆治水の状況が世間に知られるようになり、永吉惣兵衛、腰物にて怪我相果候に付「云々と書かれた有名な「一札之事」の証文をはじめとした一〇二分の埋葬証文で



す。永吉の命日は宝曆四年（一七五四）四月一四日。宝曆治水最初の犠牲者で、一期工事が開始された二月一七日から一ヶ月も経たない間に亡くなっています。海蔵寺の寺史によれば、宝曆四、五年頃の任職は第一二世雲峰珍龍和尚。当時、犠牲者の遺骸を葬るにも幕府の手前なかなか難しく、雲峰珍龍和尚が快諾し、ようやく埋葬されたといわれています。平田鞆負の遺

骸も揖斐川を舟で運ばれてここに遺髪を置いて、京都の大黒寺へ運ばれたといわれています。しかしその真相はよくわからないというのが現状です。特に海蔵寺は禅宗で世襲という風習がなかったため、親から子へと伝承されたものがない。薩摩の武家の多くは禅宗を信仰していますから、それが埋葬の理由なのでしょうが、なぜ揖斐川を下つてくるのか、桑名市まで来たのか、歴史の謎

と「うた」とです。最近では宝曆治水の評価をめぐっても諸説があるようで、価値観や考え方によって分かれているようです。でも、実際輪中の人たちは助かっています。お年寄りたちの中には、「薩摩に足を向けては寝られない」という声を聞きます。だからこそ、顕彰活動の原点です。海蔵寺には永吉惣兵衛をはじめとした薩摩義士一四名が眠っています。彼らの心を語りついでいく。助け合いの心を学びながら、二五〇年経た今もそして明日も肅々と供養をしていきたいと思っています。

祖先が治水偉業に命を傾けた輪中地帯。その土地改良に取り組んだ半生。 平田家一八代当主 平田正風氏

平田家一八代当主を相続したのは昭和一六年（一九四一）です。わずか六歳の時でした。平田鞆負から数えて九代目にあたります。祖母の八ナから家督を相続しました。八ナの父は平田正真、天保九年（一八三八）に生まれ、兵員奉行に任ぜられていました。廃藩後の明治二年（一九三七）調所広郷の孫にあたるトモと婚姻、



その二女が八ナです。八ナが常々言っていたのは「平田家の再興」。幼かった私は薩摩義士のことは全くわかっていませんでした。薩摩義士について勉強を始めたのは昭和三〇年（一九五五）岐阜県に就職してからです。就職にあたって学校の先生が岐阜県に手紙を書いてくれたのですが、そこに平田鞆負の子孫であると書いてあったようです。当時岐阜県には鹿児島島出身の総務部長がいらしたのですが、そのせいか

随分私を大切にしてくれて、ありがたやら、肩身が狭いやら。こちらは新入りの職員でしたから、恐縮するばかりでした。最初の配属先は高須輪中土地改良事業所で、最後退職する前に配属されたのもここです。輪中が土地改良されていく状況をすべて見届けたことになりました。その変遷をまとめたのが「高須輪中土地改良史」。土地改良史と事業史の二部構成です。編集室長として資料の収集から執筆

編集まですべて担当しました。宝曆治水から二五〇年。歴史的検証をしよつにも史料が風化しているため、不明な部分が多い鞆負の足跡も同様です。そういった意味でも輪中の変遷史を残せたということに胸に迫るものがあります。しかも祖先が治水事業に命を傾けた土地ですから。

若い世代に語り継いでいくこと。それが現代の顕彰活動。

鹿児島県薩摩義士顕彰会会長 島津修久氏



鹿児島県薩摩義士顕彰会は大正六年の発足以来、さまざまな活動を。二つ目は、強い使命感をもって成し遂げた仕事は非常に素晴らしい成果を残したことです。未代まで残る優れた業績を残した。それは鹿児島の人たちが、その時代までもっていた精度の高い測量技術や土木技術など、それらの技術を十分に生かしてお役目を果たした。良い仕事を残した。そういうことに対する誇りといえますか。自分たちの先人が優れた技術・能力をもっていたのだということ

を語っていききたいですね。三つ目は、伊勢湾台風のような大災害に際しても薩摩の人たちが築いた堤防は壊れず、水害から人々をしっかりと守りつた点です。それが縁で、岐阜と鹿児島島の友好交流が活発化しています。こうした友好関係を末長く続けてもらいたいものですね。

鹿児島県の二五〇周年記念事業としては、二点を実施しました。

一つ目は鹿児島県歴史資料センター「黎明館」における特別展示です。宝曆治水の概要と顕彰事業の流れを理解していただくために、秘宝展示などを行いました。二つ目は講師による特別講演です。当初は宝曆治水を描いた小説「孤愁の岸」の作者である杉本苑子さんを予定していましたが、体調不良のため降板され

ました。それで急ぎよ、鹿児島市会場では、近世史の第一人者であり尚古集成館の前館長の芳即正（かほしむらまさ）さんに、国分市会場では、鹿児島大学教授の原口泉さんに講演を依頼し、大盛況となりました。そして三つ目は、恒例になっている慰霊祭の開催です。海津町では、自転車でなぐ友好の絆、薩摩義士の凱旋（さいせん）として、一般公募者を含めた海津町青年のついでに協議会らが四月二十五日に治水神社を出発し、自転車でリレーしながら、五月二十五日には鹿児島市で開催した薩摩義士二五〇年祭式典前に「トル」されました。彼らを温かくお迎えすることも、大切な顕彰活動です。これからは宝曆治水の意義を若い世代に語り伝えながら、顕彰活動を末永く続けていきたいと願っています。

行ってきましたが、宝曆治水二五〇年を迎え、次の若い世代に次の三点を伝えていかなければと考えています。

一つ目は、御手伝普請つまり、幕府から木曾川の治水工事を命ぜられたときに選択肢としては一つしかなかったというところ。薩摩藩を潰す計画だったのだから断つて戦つべきだとか、いろいろな議論があったかもしれませんが、選択肢

宝暦治水の絆をさらに未来へ。

薩摩義士二五〇年祭

鹿児島市平田公園 五月二五日

鹿児島市の平田公園で、薩摩義士二五〇年祭へ、鹿児島県薩摩義士顕彰会主催（）が開催されました。岐阜・三重両県と鹿児島島の関係者をはじめ中・高校生を含む約七〇〇人が参列、友好の絆を深めつつ、偉業を後世に伝えていくことを確かめました。

式典に先立つ午前九時二〇分、岐阜県海津町からの自転車リレーの最終走者が到着、花火と大きな拍手で迎えられました。

海津町青年のついでに協議会会員らが中心となって企画された、薩摩義士二五〇年目の凱旋には、工事に赴いた薩摩藩士たちの行程約六三〇kmを、七〇人がたすきをつなぎ一ヶ月かけてたどるといふもの。陣羽

織姿の永田美彦協議会委員長は、「義士への報恩感謝の強い絆が薩摩への道を作り上げました。リレーを通して義士の想いが感じられたように思います。これからも友好を深め、絆を強くしていきたい」と感涙にむせびながら奉納文を読み上げました。

式典で謝辞を述べた海津町立日新中三年の水谷哲也君は、左足骨折をおしての鹿児島訪問。義士の偉業を僕たちが大切に、後輩たちに伝えていきたい。これからも鹿児島、国分との交流の輪を深めたいと力強い口調でスピーチしました。

その他、東郷示現流と薬丸野太刀自顕流による古武道と詩吟なども奉納されました。



平田公園正面



ゴールに向かう自転車リレーの皆さん



式典状況



ゴールの報告をする協議会委員長 永田美彦氏



詩吟の奉納



東郷示現流による古武道の奉納



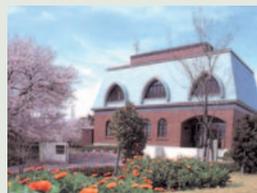
薩摩義士碑（鹿児島市城山町）

木曾川文庫利用案内



- 《開館時間》午前9時～午後4時30分
- 《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
- 《入館料》無料
- 《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平間門管理所・木曾川文庫
〒496-0947 愛知県海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233



表紙写真 上左：平田鞆負翁銅像（鹿児島市平田公園） 上右：宝暦治水碑 中：治水神社 下：朝焼けの桜島

編集後記

弊紙では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

宝暦治水特集号の編集にあたっては、島津修久氏、林董一氏、黒田安雄氏をはじめ多くの方々のご協力を頂きました。ありがとうございました。

今回は愛知県海部郡立田村を特集します。

宛先 「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

木曾川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

『KISSO』Vol.51 平成16年7月発行

発行：国土交通省中部地方整備局木曾川下流河川事務所 〒511-0002三重県桑名市大字福島465 TEL(0594)24-5715

木曾川下流河川事務所ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu>

制作：財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル) TEL(052)565-1976